HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	教員生活の最後に(退職記念)
著者	野坂，幸弘
引用	北海学園大学人文論集，38：23-24
発行日	2008-03-00

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

教員生活の最後に

野　坂　幸　弘

今年度後期の授業（日本文学史Ⅳ，１年生主体の100名前後のクラス）で，毎回，出席調査カードの空欄に「最近興味をもった文学的話題」なるものを自由に書いてもらうことにした。教員生活で初めての経験である。

この課題に学生諸君は予想していたよりはるかに素直に応じてくれた。全回を通して意欲的あるいは楽しげに取り組んでくれたのは，男女あわせて20数名である(当然ながらまったく無反応という学生も少数ではあるがいた)。課題とはべつに，目の具合の悪そうな様子を心配してくれたり，嗄れた喉に効くという家伝の秘法を教えてくれたりしたこともあって，いまどきの学生の心根の優しさに感じ入ったこともある。

授業の始めに，前回分のさまざまな内容のうち，タイプの異なるもの10名分ほどを紹介して，簡単にコメントすることにしていた。時間を多少は費やしたのだが，普通の講義のときとは違って，真剣にというか興味ありげに聞いてくれて，回数を重ねるうちに，大人数の教室では経験したことがないような双方向の交感の場ができかかっていたような気がする。このこと自体，さらに詳しい検討を要するとおもわれるが，ここでは「最近興味をもった文学的話題」に触れてみたい。

当面する現象から，ケータイ小説，ライトノベルの流行，それらの映画化に関連する話題が多くなるのは当然であろう。意外だったのは，半数ぐらいがこれらをそのまま受け止めているのではなくて，ある種の距離をおいて，拒否的にみているらしいことである。たとえば〈本質的に人は文字を通して物語を読むのが好きなのだろう〉とか〈映像と言語表象とは異なるのではないか〉というような意見や疑問が感想的な短文の合間にしばしば発せられる。これらは一枚のカードの中にまとまったかたちで書かれて

いるのではなくて，べつべつに断片的に記されているわけで，総合してみれば，〈文学とはそもそも何なのか〉，〈文学の価値は何によってきまるのか〉というような，本来的かつ真摯な問いとして，行間というよりはカードの間から，こちらに突き刺さってくる。

大学生になるということは，価値観の大きな変動のなかに投げ出されて，ことを文学にかぎって言うなら，その未知の領域において〈われわれが読むべきものはどういうものなのか，それははたして存在するのか〉，という類の疑問を抱かなければならないということである。私はそういうナイーブな心の動きに接することができたようである，教員生活の最後に。